



のんびりVRMMO記 9

ALPHAPOLIS

まぐる猫@恢猫
Maguroneko@kaine

リグ

かわい
可愛らしい
蜘蛛の魔物。
ツグミのフードの
中が定位置。

ヒバリ
このえ ひばり
(九重雲雀)

双子の姉。13歳。
活発な性格で、
幽霊以外は
怖いものなし。

いいたみさ
ミイ(飯田美紗)

おさなしみ
双子の幼馴染。13歳。
外見に反し、戦闘大好きの
ハードゲーマー。

メイ

二足歩行の羊の魔物。
身の丈より大きな
ハンマーが武器。

このえ つぐみ
ツグミ(九重鶯)

本編の主人公。25歳。
あだこ
双子の妹達の親代わりで、
ゲーム世界では生産職に。

小麦

だちやど
にゃんこ太刀に宿る猫又のペット。
小桜(白)と小麦(黒)で一心同体。

このえ ひたき
ヒタキ(九重鶯)

双子の妹。13歳。
あまり感情を表に出さないが、
実は悪戯っ子。
肩に乗っているのは小桜。

主な登場人物
Main Characters

今日は日曜日なので、俺——九重ここのちゅうぶ頼は、平日の朝より少しだけ遅おそく起きた。いつものように着替えてリビングに行く、双子ふたごの妹達、雲雀ひばりと鵜ひたきの姿はない。彼女達の部屋の前を通っても物音ひとつしなかったため、まだ寝ているのだろう。用事はないし、俺もゆつくりしていいかもしれない。あ、朝食はちゃんと作るよ。冷蔵庫を開けて食材を眺ながめていると、ふと、双子との会話を思い出した。

「……そう言えば、ガレット食べてみたい、とか言ってたな」

確かテレビで特集されてたんだっけ。そば粉そばこはないけど、小麦粉もベーコンもチーズもジャガイモもあるから作ってみよう。

【REAL&MAKE】——通称R&Mの中で試ためしてからのほうが良いかもしれない。VR技術の進歩はすごい。今に始まったことじゃないけど。

そんなこんな考えながらガレット作りをしていると、雲雀と鵜ひたきが起きてきた。

俺はスープも作り、ワイワイ賑やかにいただきます。
即席にしては美味しいと思う。まあ炒めれば美味しいものばかり使っているから当然、
と言われたらちよつとアレだけど。

毎度のことながら絶賛してくれる雲雀と鶴に感謝しつつ、ペロリと平らげ、ごちそうさ
までした。

お腹がこなれるまでまったりしていたら、ハツとした表情の雲雀が話しかけてくる。

「あ！ つぐ兄い、お昼くらいにゲームやりたいんだけどいい？」

「ん？ ああ、いいけど」

「ええつとねえ、今日は久々に、ちよつとはかり長めにログインしたいんだあ。ん〜つと、
ひいちゃん先生お願いします！」

勢いに促されるまま頷くと、雲雀は満足そうな表情になり、最終的には鶴にバトンをぶ
ん投げた。

いつものことはいえ……鶴も満更ではなさそうだ。

最近ではブレイ時間が短めだったし、就寝時間が遅くならなければ良いか。俺も楽しみだし。

「ん、説明はお任せ」

鶴先生渾身の説明によると、昨日クエストボードで見つけた『世界樹に棲み着く虫系魔
物の討伐』つてのをじっくりやりたいそうだ。

「簡単に言えば、放っておくと世界樹が枯れるかもしれないから駆除を！ つてことらし
い。

世界樹は大きくて生命力に溢れているが、明日には駄目になっていくかもしれないし、
世界樹の樹液を吸って成長した魔物が、聖域に這い出してくるかもしれない。

世界樹は魔法の源である魔素を放出する、妖精族の母親でもあるから、枯れたら世界の
平穏が揺らぎかねない……とかなんとか。

あまり頭に入ってこなかったけど、雲雀と鶴がやりたいって言うなら付き合うよ。

ちなみに今日は、ミイこと飯田美紗ちゃんの参加はなし。

朝一番にメールが来たという。メールを打つ美紗ちゃんの姿が目に見えかぶ。

血涙を流すくらい悔しがついていそうだけど、現実も大事だよ、美紗ちゃん。あ、俺達もな。

「なるほど。俺は構わないけど、いつ頃ゲームやるんだ？」

「んん〜、お昼食べたあとかなあ」

「分かった」

お昼を食べたあとならまだ時間があるし、洗濯物でも洗おうかな。

それと、しばらくやってなかった玄関掃除もしたいし、夕食は最近うどん祭りが続いたから、そろそろ違うものを食べたい。

そんなことを考えていたら、鶴がいきなり雲雀の腕を掴んだ。

「雲雀ちゃん、私達は例の件について、アレとソレとコレの話し合いをしないとイケない」
「へ?」

2階へと連れていかれる雲雀。

それを横目に、俺は十分にお腹がこなれたことを確認して、食器を洗うため立ち上がる。まったり出来るのも主夫の特権だよなあ、とのんびり考えつつ、シンクに食器を置いて、蛇口を捻った。

片付けが済んだら玄関に行つて、隅にかなり積もっていた砂埃に嘩然としながら、念入りに掃除。

雲雀も鶴も2階に上がったまま帰つて来ないけど、俺は気にせず、まったりのんびり洗

濯をしたり、なんやかんやしたり。

洗濯物を干してリビングに戻り時計を見ると、ちょうど針が正午を指していた。

「……あ、昼飯時か」

思わず独り言を呟き、小腹が空いたなあとお腹を擦る。

2階からトタトタ音がしたと思つたら、階段のほうが騒がしくなり、雲雀と鶴が元気にリビングの扉を開いた。

「あれとかそれとかいろいろ終わらせた雲雀、参上!」

「いつものことしかしてない。つく兄、お昼なににするの?」

鶴も眉をへによつと下げ、俺と同じようにお腹を擦っていた。

早めに昼食を用意してあげないとって気分になる。

雲雀も食いしん坊だけど、実は鶴も負けてないんだよね。

簡単お手軽大量レシビは……つと。

キッチンへ向かい、かけてあるエプロンを着用しつつ、そんなことを考える。

少し趣向しゆうこうを変えて、お好み焼きでもいいか。ひたすらキャベツを切り刻む作業ききをがんばらないといけないけど。

手伝うことはないかと聞かれたが、お好み焼きは本当に手伝ってもらうことが少ない。

単純作業なら、2人がとても良く働いてくれるのは知ってるよ、うん。

俺がキャベツを刻み、雲雀と鶴にはテーブルを拭いたり皿を出してもらったり。

そんなことを指示しながら、3人分のお好み焼きを作り上げた。青のりと鰹節かつおぶしも忘れずに。

「んん〜！ んまあ〜！」

「ん、食物繊維せんいたっぷり。んまんま」

たっぷりキャベツと、冷蔵庫に眠ひっていたニンジンを入れた野菜マシマシお好み焼きは、とても美味しかった。

食べ終わった食器はキッチンのシンクへ持っていき、水に浸けておく。

俺がキッチンからリビングに戻ったときには、すでにゲームの準備が終わっていた。次にやることは決まっているとはいえ、早すぎると思うんだけど。

雲雀と鶴の期待した眼差しまなざしに負けた俺は、雲雀からヘッドセットを受け取り、所定の位置に座ってかぶる。

あ、どれくらいゲームするのか聞き忘れた。

ゲーム内で聞くことにして、ヘッドセットのボタンを押したら、すぐさま意識が吸い込まれた。



意識が浮上する感覚を覚えて目を開くと、目の前に広がるのはちよつと見慣れない風景。プレイヤー冒険者がほとんどおらず、手のひらサイズの妖精まよばいが、楽しそうに空を飛んでいる。

ここ、世界樹の上は雲から突き抜けているので、サンサンと太陽光が降り注ぐ。でも寒かったり暑かったりはせず、不思議な力で適温に保たれていた。

時折風で揺らめく世界樹の葉を見ながらリグ達を喚び出していると、ヒバリとヒタキもやって来た。冒険者の数が少ないので、慌あわてずに集合できるのはいいかもしれないな。

いつものように端へ移動することもなく、予定通りクエストを受けるため、俺達はギルドへ向かった。

暇ひまそうにしている受付の人が姿勢を直すのを横目に見つつ、クエストボードの前で、依

頼を流し読み。すぐに虫系魔物の討伐依頼を見つけられた。他のクエストは受けず、今日はこれだけだ。

【世界樹の天然迷宮に棲み着く虫系魔物の討伐】

【依頼者】 聖域ギルド

世界樹の天然迷宮に棲み着いている、虫系魔物を討伐してください。下へ行くほど魔物の強さが上がります。火属性魔法の爆裂火炎魔法を除き、火を使用しても構いません。道案内が必要でしたら申請してください。

【ランク】 B〜E

【報酬】 虫系魔物1匹につき300M。

諸注意を聞き、道案内をお願いしたら、少しだけ待たされた。

やがて入り口からワイワイ楽しそうな声が響き渡ったので、そちらを凝視。

道案内として、以前世話になったスイが来てくれたんだけど、楽しそうだからって他に5人、妖精がくっついてきた。

水色のスイ、赤色のアカ、緑色のリヨク、茶色のチャ、白色のハク、黒色のコク。

全員普通の妖精より、頭ひとつ力の強い子達ばかりらしい。でも楽しいことが大好きな

あたり、やっぱり他の子と同じような気もする。

ヒバリ達も喜んでいるのでまあいいとして、早速世界樹の天然迷宮へ向かうとしよう。このままだと時間が過ぎるだけだ。



世界樹の天然迷宮への入り口は、ギルドの奥にある扉だった。

扉の数歩先に階段があり、どこまで続いているかは見えない。でもゲームの設定上、疲労は感じないから、心を強く持てばいいと思う。

カンテラ？ みたいな照明器具で照らしてあるので、おっかなびつくり歩かずに済みそうなのは良いことだ。

リグ達も妖精達もヒバリ達もついて来ていることを確認し、俺達は焦らずのんびりと階段を下りていく。

「えっと、あのね、スイ達は、虫系魔物が出る場所に案内してくれるんだよね？」

可愛らしい妖精に興味を尽きないのか、先に行くヒバリが、弾んだ声で尋ねた。

『私が案内するわよ！ 水の妖精だもの。母なる世界樹に流れる水の力を借りて教えるから、隅から隅まで魔物を倒しましょう！』

『あ、ボク達はスイとは違って、ただの賑やかしなんでお気になさらず』
「アツハイ」

スイは元気に答えてくれたんだけど、他の5人は賑やかしなんだそうなの。

……に、賑やかし？ でも1人よりは2人、2人よりは6人のほうが良い。多分。

5分以上歩くと、ようやく底が見えてきて、広間のようになっていた。

世界樹にこんな大穴が開いてていいのかもしれないかとスイに尋ねたら、気にしなくても良いらしい。全体の大きさを考えると問題ないんだとか。

まあスイ達が言うならそうなんだろう。

賑やかしの妖精達も交えつつ、話しながら歩く俺達。

しばらくすると、ヒバリの肩に座っていたスイが立ち上がり、俺のところへ飛んできて髪を引っ張った。

『こつちよこつち！ 母様の体を貪る不届き者がいるのは！』

瞬時にもっとも権限を持っていそうな人を見抜くのはすごいけど、髪の毛を引っ張るのははいただけない。あと、貪るって言葉はどこで覚えたの？

でもまあ、世界樹はスイにとって母親のような存在だから、気にしないでおこう。引っ張られる感覚はチョンチョンで痛くないし。

彼女の必死な案内でやって来たのは、大きな穴のような袋小路だった。

『あ、アイツらよ！』

爽やかな甘みのある香りが微かに広がる袋小路。

そこにいたのは、1メートル程度もある平たい楕円形で、緑褐色や青銅色の光沢を放つ……カナブンだった。カナブンは樹液や熟した果実が好物だし、それでいいよな。

壁から滴る世界樹の樹液に群がる様子は圧巻の一言。

「うわ……」

樹液に群がりウゾウゾと蠢くカナブンの姿に、さすがのヒタキもドン引きしている。

「え、まあいいか……ヒバリ、メイが勝つと思う？」
 「え？ あ、うん！ もちろん！ メイも力持ちだもん。負けないよ」

なぜかヒタキに促され、メイは大鉄槌を担いで可愛らしく走り出した。やる気があるのはいいと思う。

小桜と小麦はまったりしている一方で、スイがメイのことを応援してくれる。

その他の妖精達はいつの間にか木のカップを持ち、そこかしこから滲み出している樹液を汲んで、宴会を始めていた。2度見してしまったのは俺だけじゃないはず。

いろいろと放っておくことにして、メイを見守ろう。

時間をかけてカブトムシのところまでたどり着いたメイ。

カブトムシもメイを無視できないらしく、ゆったりとメイのほうへ向いた。

両者は睨み合い、じりじり距離を狭めていく。

次の瞬間、カブトムシは角で下から掬い上げるような突きを繰り出し、メイはそれを黒金の鉄槌で上へ弾き返した。

どうやら力比べは、我が家の破壊神に軍配が上がったようだ。

カブトムシの体が浮き上がり、そのままドンツと音を立てて引つ繰り返る。

メイは角を上へ弾いた流れで振りかぶり、恐らくカブトムシで一番柔らかいお腹へ、大

鉄槌を振り下ろした。

カブトムシの魔物はメイの攻撃をくらくと身を起こそうと足を動かすも、数秒の後ピクリともしなくなる。やがて、光の粒子へ姿が変わって消え失せた。

残ったのはドロップ品。コガネムシの魔物とあまり変わらず、追加は角くらい。

『わあ。一撃必殺ってこのことを言うのね！』

『あれくらい俺でもできる』

『え、ならなんでやらないのお？ だしおしまい？』

『いくら力の強い妖精でもここじゃ赤子同然だよ、ボク達』

『お母様から飲み物もつともらおうかなあ』

メイの活躍を手放して喜んでいるのは白色のハクで、ムスツとした表情を浮かべ呟いたのが赤色のアカ。アカをおちよくる感じで言ったのは茶色のチャ、窘めたのは黒色のコク、我関せずでマイペースなのが緑色のリヨク。

なんだか妖精達の性格が分かってきたかも。スイはしっかり者だし。

あ、メイが別のカブトムシのところに向かっている。危なげなく一撃で倒してたから、そこまで気にしなくてもいいんだらうけども。

いや、待てよ。柔らかいお腹を攻撃したから一撃なのであって、かなり丈夫そうな背中はどうなんだろうか？

仲間をやられ憤っているのか、やる気というより殺る気満々な、角のない雌カブトムシ。角がなく、雄より一回りも二回りも体が小さい代わりに、どうやら動きが素早い模様。そんな相手に大鉄槌を当てるのは、少し難しいかもしれない。

「リグ、メイのお手伝い頼んでも良いか？」

「シユシユ！ シユツシユシユ！」

こういうときのための仲間、つてやつだな。

攻撃力も防御力も低いけど、素早く動いて敵の行動阻害に長けているリグ。攻撃力に全てを捧げ、動きがとても遅いメイの、最高のパートナーだと思う。

リグの糸で身動きの取れなくなったカブトムシに大鉄槌を叩き付けるも、一撃では倒れない。背中側の防御力はすごいな。

でも背中は大大きくへこみ、小刻みに痙攣している。これは半死半生ってやつか？

間髪を容れずに黒金の鉄槌を連続で振り下ろすと、カブトムシは光の粒子へと姿を変えた。

この一匹で、あたりの虫系魔物はいなくなったらしい。まあ、虫は繁殖力がすごいから探せばいくらでもいるとのこと。

安全になったこの場所で少し休憩しようと提案したら、すぐさま賛成の声が上がった。

あ、今更感はあるけど、カナブンの魔物はブンブン、カブトムシの魔物はサイカチって名前だと、ヒタキに教えてもらった。



唯一通路のない場所を背にし、俺はインベントリから休憩に必要なものを取り出す。

そのまま座っちゃってるから敷き布は無しとして、あとはお菓子と飲み物かな。

準備が終わると、ヒバリ達と妖精達がお行儀良く座り、期待したキラキラの眼差しで俺を見つめてくる。

「と、当店はセルフサービスとなっております」

軽く摘まめるお菓子とお茶セットを指差し、俺はヒバリ達から目をそらしながら言った。皆に手渡していたら終わりそうにないので。

あ、リグとメイはもちろん、俺と一緒に食べるよ。
小桜と小麦はヒバリとヒタキにお任せ。

妖精達は器用そうだから、困ったときだけ助けるスタンスでいこう。

俺がセルフサービスと言った途端、お菓子は争奪戦になってしまった。しつかり者のスイが、取り合わないようひたすら怒っていた気がする。

休憩は大体30分くらいかな。ヒバリ達と一緒に休憩セットを片付けていると、スイがわざわざ寄ってきて感謝してくれた。

俺としては、美味しく食べてくれるのが一番嬉しいから、別に良いんだけど。

その代わりと言ってはなんだけど、もつとたくさん虫系魔物がいるオススメ？ スポットを聞いてみた。

ほら、どんな魔物を倒しても1匹300Mだから。稼かせぐなら数を倒さないと。俺が倒すんじゃないけども。

俺の肩に乗ったスイは悩なやむように頬ほおに指を当て、むむむつと唸うなる。しばらく目を閉じて考えると、パツと目を開いた。

『そうねえ……もう少し奥に行くと大部屋があるんだけど、そこかしら？ んん、100匹くらいいるわ』



「100匹！」

その返答に俺は驚いた。大丈夫だとは思っただけど、俺の中の過保護成分が……。すると、ヒバリとヒタキが俺の隣に並び、満面の笑みで、俺の背中に手を当てながら言う。

「大丈夫だよ、ツグ兄い。私とひいちゃんの合体魔法が火を噴くし」

「ん。それに、このあたりの魔物はそこまで強くない。魔法でシャドウハウンドも出せるし」

「シユツシユ！」

ちょっと心配しすぎか。リグもやる気満々なのを見て、俺は片付けを終えたら出発しよう、スイに案内を頼んだ。片付けもあと少しだったからすぐ終わる。

「次の虫はどんな虫が出てくるのかなあ？」

まったくと目的地へ歩きながら、ヒバリが俺の肩に乗っているスイに問いかけた。

『あまり代わり映えはしないかも。甲虫系が多いわね』

(` `) (` `)

「そっか。魔物は魔物に変わらないから頑張つて倒すぞー！」

「めめっ！ めめめめめ」

スイの答えを聞いたヒバリが元気よく右手を突き上げ、メイも便乗するように、軽くピョンツと飛んだ。敵のおかわりが欲しいみたいだしな、メイは。

スイと妖精達のコントを見たり、樹液が染み出したところに群がる虫系魔物をサクツと倒したり、寄り道をしたり。

まあ、そこまでクエストの使命感に苛まれてもいいい……かな。時間の許す限り、できるだけ魔物を倒すよ、ヒバリ達が。俺はほら、お察しください。

そんなこんなで、スイのオススメスポットにたどり着いた俺達。

大部屋と呼ばれるだけあって、広さは学校の体育館、くらいかな？ 世界樹の樹液に色とりどりの虫系魔物が群がっている。

なんとも言い難いゾワゾワした感じに襲われつつ、ちょっとだけ作戦会議。

「私達のレベル上げも兼ねてるから、まずは小桜と小麦に、にゃん術で大雑把に倒してもらうっ。」

「ん、リグとメイに比べて、小桜と小麦はレベルが低い。ツグ兄にも経験値入るから一石二鳥」

こうやって口に出して確認すれば、間違いは起きないはず。

そのあとの作戦について双子に尋ねると、各自殲滅と、あっけらかんと言われてしまう。にゃん術であらかた倒せるし、それでいい……のか？ いいか。

納得した俺達は、それぞれ武器を担いだり、多くの魔物が魔法の範囲内に入るようポジション調整したり。

「小桜、小麦。あいつらに、にゃん術お願い！」

「にゃんにゃん」

(*ω'人'ω*)

ヒバリの声に反応して、名前を呼ばれた2匹がにゃん術を発動させる。

見えない風の爪が音を立てながら直進し、様々な虫系魔物を巻き込み、派手に世界樹にぶつかって消えた。

「……すごい音がしたけど、ホントに世界樹の壁、大丈夫？ スイ達のお母さんでしょ？」

い、今更だけど」

予想以上の攻撃に不安が広がったのか、火を使ったときと同じように、恐る恐るスイに尋ねるヒバリ。やっぱりどうしても気になるよな。

『ふふっ、大丈夫大丈夫。母様は超弩級龍のプレスを受けても、無傷でケロツとしてるもの。あんなのそよ風程度じゃない？』

「ワア、ソウナンダー」

スイが胸を張って教えてくれたとき、ヒバリの目はなんだか虚ろになっていた。俺はよく分からないけど、すごいんだな世界樹って。

「あ、虫達こっちに来るよ！ 皆頑張って！」

ハツとしたヒバリが剣と盾を構え、皆に聞こえるよう声を張り上げた。小桜と小麦が相当の魔物を倒したので、敵愾心がこちらに向いたのだろう。

ヒバリは敵の注意を引きつけるスキルを使い駆け出したが、ウゾウゾ集まってくる虫系

魔物を前に、「ひえっ！」と怖気づいた。

ムカデのような、カマキリのような、バッタのような……それらに加えて魔物の幼虫。さすがに俺でも嫌な感じだから仕方ない。

ヒバリの尊い犠牲を無駄にしないために、俺達は散開して討伐を始めた。スイ達妖精チームは見学ということで。

部屋の中央で派手に戦っているヒバリ達を横目に、俺とリグも戦闘開始。

「リグ。俺達はいつも通り、魔物を糸で巻きにしていこう」

「シユッ！ シユシユ」

「じゃあ、あの芋虫みたいな魔物から」

俺達が狙うのは、俺より一回り小さな芋虫の魔物だ。動きはメイよりも遅く、安心して対峙できる……はず。ただ魔物は魔物なので、気を抜かずにいきたい。

「動きを止める感じで、粘着性の高い糸を頼む」

「シユッ！」

(*・w・*)

芋虫は嫌そうに体を振ったりしているけど、全く振り払っておらず、次第に動きが鈍くなっていた。こんなものかな？ と、次の獲物を探す俺達。

近くにいるヒタキに、トドメを刺すのをお願いしておくのを忘れずに。

中央の激戦区には近寄らず、はぐれた魔物を狙い続ける。

するとスイが俺の肩に乗ってきて、残りの体力が少ない魔物の存在を教えてくれた。

その魔物にはリグ特製の毒牙をプレゼント。
 なんて俺のところに来たのか尋ねたら、双子の戦闘は安定して心配いらなから、とのこと。

2人はきちんと考えて職業を選んてるからな。リグ達も仲間になって、よりバランスの良いパーティになってきたってのもあるし？

妹達が褒められたら自分のことのように嬉しい。うん。

「ツグ兄い、倒し終わったよー！」

スイと話しながら立ち回っていたら、ヒバリが鉄の剣を頭上に掲げ、ブンブン振り回し報告してくれる。危ないからそれはやめておこうか。

そう言えば、益虫というか、中立の魔物がいるのかスイに聞いてみた。

自然界では、害虫を食べたり受粉の手助けをしてくれたりする益虫がいるんだけど、ここではどうだろう？

スイがきよとんとするも、すぐに明るい表情になって楽しそうに笑う。そして一言――『母様の中にある虫の魔物はすべからず害虫よ』と。

あ、はい。樹液を吸ったり木を削ったり、確かに木を傷める行為だからな。見つけ次第退治の方向で。



大量の虫系魔物を倒した俺達は、次の獲物を求めて歩き出した。

小道に蔓延る虫系魔物を倒し、なにやら採めている虫系魔物を見つけては漁夫の利を狙う。

スイに許可をもらい、世界樹の樹液のご相伴に与り、休憩することも忘れない。

「倒しても倒しても終わりそうにないね」

「ん、虫はいくらでも湧いてくる」

「お金がっばがっばだからいいけどね！」

「ん、おいしいクエスト」

虫系魔物はいくら倒してもワラワラと湧いてくるみたい。

俺達はそれなりにお金を稼げて、スイ達は害虫が少なくなって嬉しい。ええと、win・winってやつだな。

迷宮に窓はなく、外の様子が分からないから、時間の感覚はないに等しい。でも俺にはゲームのウインドウがあるので、それを確認すれば問題なし。

ゲーム内の時間を見てみると、なんといつの間にか夜になっていた。

そのことを伝えると、スイ達が大きく欠伸をした。妖精はもう寝る時間らしい。

人間も妖精も睡眠は大事なので、眠そうにしているスイ達を連れ、俺達は来た道を引き返した。

行きがてら、敵を見つけたら即滅の心構えで戦っていたので、帰り道は呆気ないほどスムーズに進むことができた。20分程度でギルドへ到着。

クエスト報告をする前に、眠たそうな妖精達を帰してあげようと思ったんだけど……あまりにフラフラだ。

これはついていったほうがいいのか？ あ、でも黒色のコクが夜に強いらしく、こんな事態に慣れているらしいので任せようと思う。

「ふあああ、妖精案内にんのかつようありがとお」

「ばいばいにんげん」

「またおかしくれてもいいぞ」

「たによしはつらふえすう」

『妖精の案内がまた必要でしたら、ギルドの受付にてお申し出ください。ほら、皆眠たいのは分かるけど寝床までは頑張って』

「うええええ」

スイ、チャ、アカ、ハク、コク、リヨクを、ギルドの出入り口で見送る俺達。

妖精はNPC（ノンプレイヤーキャラクター）から眠かったみたいだけど、リグ達ベツトは、あまり眠気を感じていないようだ。まあ、寝られるときにいつでも寝てるからってのもあるけど。

建物に入り、クエスト報告をするため、人っ子ひとりいない受付へ向かう。

どれくらい虫系魔物を倒したかというと、なんと3329匹で、金額にして9万8700M。オスヌメの狩り場を教えてもらったおかげで、効率が良かったんじゃないだろうか？

基本、勝てない相手に挑いどまないからな、俺達。安心第一。

クエスト報酬を受け取ったらギルドを出て、満天の星の下、どこの街にもある噴水広場へ。出歩いている冒険者は片手で教えるほど。

雲がないから空が綺麗なんだな、とか考えていたら、ヒバリがモジモジしながら俺のこのを見た。

なんだ？ 討伐の追加か？

「ツグ兄い、ログアウトするのまだいい？」

「別にいいけど、やりたいことでもあるのか？」

「ん、普段は無理そうなツリーハウスのお宿に泊まりたい」

「高いとこのもつと高いとこ！」

俺が問いかけると、ヒバリではなく、ヒタキが代わりに話してくれた。

確かにツリーハウスに泊まれるチャンスなんてほとんどない。

俺としても、少年の頃の冒険心が刺激されるというかなんというか……簡潔かんけつに言えば賛成。

決まってるからの動きが速いのが我が家族なので、ヒタキに案内してもらい、すぐに部屋を確保する俺達。

ヒバリ達が見繕^{みと}つてくれたのは、素泊^{すど}まり限定の宿らしい。2、3人用の部屋が世界樹の太い枝の上に点在しており、本当に寝るだけの造り^{つくり}だった。

あ、もちろんリグ達も泊まれるから安心。

部屋に行くための梯子^{はし}はしっかり作られていたので、ちょっとほっとした。縄^{なわ}とか縄梯^{なわばし}子の類^{たぐい}いだったら、登れない自信しかない。

ツリーハウスの中は爽やかな木の香りで満ちていて、ベッドではなく綿^{わた}のたつぷり入った布団が置かれていた。

床に敷いてあるのは……世界樹の葉？ 肉厚^{にくあつ}の葉はとてもフカフカで、この上でもよく眠れそうだ。

「えへへ、ちょっと狭^{せま}いけどワクワクするねえ！」

「あ、これサービスだつて」

ヒバリが狭い部屋を楽しむ一方で、ヒタキが僅^{わずか}かなスペースに置かれた果物に気づく。小さなメツセージカードが添^そえられていて、ヒタキの言つたとおり、サービスだと書いてあつた。

(ン`エ`)ン

「うひょー！ 新鮮^{しんせん}果物！ 美味しい！ へへへ、お裾^{すそ}分け！」

「めえめめつ」

瑞々^{みずみず}しい果物を口に含んだヒバリが、パカッと口を開けて待つメイ達にも配^{ばい}っている。果物を食べながら、眠る必要はあまりないので、少しお喋^{しゃべ}りすることにした。

世界樹は雪深い場所にあるのに果物が出てくるのは、妖精や精霊のおかげとか、歓迎の意味があるとか。あと船や機関車のように、プレイヤーが交通機関に手を入れたから、とか。

ふと、今日後半の予定について気になって、ヒバリとヒタキのほうに顔を向けて尋ねる。

「今日は午後からもログインするけど、なにをするのか決まっているのか？ また虫系魔物の退治か？」

「ん？ んーん、ちゃんと考えてるよ！ ひいちゃんが！」

「それ、考えてるって言わないと思うなあ」

ヒバリが胸を張ってキメ顔をしていたので、軽くデコピンしておいた。

「楽しそうに肩を小刻みに揺らすヒタキに教えてもらおうと、次の目的地は北の島らしい。」

排他的な独立国家だけど、見習い天使ヒバリがいればなんの問題もなく入国できるとのこと。

「ここは試される大地。そして、広さが普通の何倍もある。鳥に行くにはめっちゃ移動するしかない」

「ええと確か、最北端の街に行かないと島への移動手段がないよ。けど、機関車が通ってるのはちょうど半分くらいまで。そこからは歩きか、別の手段しかなくて、一番オススメなのが犬ぞり！」

「ん、覚えてて偉い」

「えへへ」

きつちり決まっているならいいんだが、その褒め方は斬新だと思う。

ブドウのようなリングゴのような果物を一気に房から外し、ひとつりグの口に入れてはひとつメイの口に入れ、ひとつ小桜の、ひとつ小麦の……と繰り返しつつ、双子の話を聞くとりあえず、今日2回目のログインでなにをしたのか分かった。

ヒバリとヒタキが行きたいと言うならば、お兄ちゃんはどこまでもついて行こう。移動するだけでも楽しいからな。

お喋りをしていたらあつという間に時間が過ぎ、出入り口や窓から見える空が白んできた。

朝になったら、数えるほどしかないけど、大通りのお店とか覗いてからログアウトしよう。もしかしたら、ここでしか買えないものがあるかもしれない。

お喋りの途中で寝ていたリグ達を起こし、俺達はツリーハウスをあとにした。

「ちよっと買い食いしてみよう！」

「あんなに果物食べたのに買い食いなんて、じゆるっ」

「なんか良いものあるといいな」

早朝の中央広場はゆつたりとした時間が流れており、のんびりしたい人にとっては最高の場所かもしれない。まあ、ここに来るまでがとてつもなく大変ではあるけど。

俺達も周囲に合わせてまったりと歩きつつ、数えるほどしかない屋台や露天を覗き込む。下の聖域から買っているのか、品揃えは悪くない。

人通りは多くないので、俺の目の届く範囲にいれば好きにしていると伝えて、ヒバリ達にお小遣いを握らせた。

すると、張り切った様子の双子はリグ以外を引き連れ、お目当ての屋台へ一直線に行っ

てしまう。あ、リグは俺のボディガードだからな。

「このお肉とお野菜のセットください。あと……」

和やかな笑みを浮かべた店主と話しながら買い物をしていたら、必要以上に買ってしまった。

でも、『今のは妹さん？』とつても可愛らしいわねえ』とか言われたら、多少奮発してもしょうがないだろう。

それに、食材はたくさん買ってもすぐ消費されるし。ヒバリ達によつてな。



いろいろ買い込んでからヒバリ達の元へ向かうと、皆で楽しそうに食い食いしていた。ヒバリが両手に持っていた食べ物をひとつ、俺に渡してくれたので、リグと分け合つて食べる。

ええと、これは芽キャベツの串焼き？ 甘塩っぱいタレがかかっている、少し焦げたところが香ばしい。

＼(・w・)／ (*°w°*)

「うん、野菜が甘くてうまい」

「シュッシュ」

「あとは全部食べちゃって大丈夫だぞ」

「シュ！ シューッシュ」

この野菜の甘さの理由は、雪の下にでも埋めているからだろうか？ ご機嫌なリグに残りの串焼きをあげ、リグの口についたタレを拭いた。

ヒバリ達も食べ終わっており、いったんログアウトをするために中央広場へ。

相も変わらず冒険者達は少ないけど、妖精達が飛び回っていて、楽しくはしゃぐ声に溢れている。

妖精も人みたいな存在だから、人が少ないってことはない……か？

いや、こういう解説はヒタキ先生の領分だからな。俺はノーコメントとしておこう。沈黙は金、雄弁は銀だ。

いつものようにリグ達を労ってからステータスを【休眠】状態にし、ヒバリとヒタキにしまったことはいかないか聞いて、【ログアウト】ボタンをポチリ。

まあ、今日は夕飯を食べたあとログインするから、後回しにしても良いんだけど。

とにかく忘れちゃいけないのは、リグ達を【休眠】にすることだな。忘れると俺達がログインするまでその場で待機になるみたいだし。



意識が浮上する感覚に目を開くと、涎が口端に光る雲雀と、お行儀良くクッションにもたれかかる鶺鴒が目の前にいた。

とりあえずヘッドセットを外したら、雲雀の前にティッシュを置いてやろう。

続けて起きた双子は元氣よくヘッドセットを外し、ググツと気持ちよさそうに背伸び。それ、本当に気持ちいいよな。

「んん〜っ！ 結構遊んだと思ったけど、まだそんなに時間経ってないのが驚きだよな」

「ん、驚き。最新技術はやバイね」

「ねえ〜」

楽しそうにお喋りしている2人にヘッドセットを渡して片付けを任せ、俺はいつものように、食器を洗うためにキッチンへ向かう。

エプロンをして無心で皿洗いしていると、カウンターの向こうから雲雀が顔を出し、モジモジしながら俺に問いかけてきた。

「ね〜、つく兄い〜、夕飯食べ終わったら、またゲームしてもいいよね？」

「ん？ もちろん」

「えへへ、聞きたかっただけ！ 邪魔してごめんね」

俺が手を止めずに返答すると、雲雀は嬉しそうに笑い、2階へ上がっていく。

一方の鶺鴒は、リビングでテレビにかじり付いていた。

あれは、お昼の2時間サスペンスドラマ？ なんて？ 普段はあまり興味を示さない鶺鴒なので、俺も俄然興味が湧いてしまう。

ここ最近で、一番速いスピードで食器洗いを終わらせ、俺も鶺鴒の隣に座ってテレビを見る。番組はまだ始まったばかりだった。

「真剣に見てるけど、面白いのか？」

「……ん、見るつもりはなかった。けど、なんか、メロンパンで殺人が発生した。から、見るしかないと思った」